

# 虫蝕

めけめけ



## ボクは5年生

---

ボクは小学5年生。。。やんちゃな盛りの都会の小学生。

町内の神社やあき家、休日の町工場なんかに忍び込んで、ささやかな悪事を繰り返していた。

小学5年生とは、今にして思えば、人生における出発点みたいなものかもしれない。

ワタシにとってはそうだったに違いない。

まじめに働く両親を持ち、2歳下には気の合う弟と7つ下の妹がいる。

兄としての自覚、共働きの親に対する長男としての責任感みたいなもの。

学校での成績は普通であり、特に担任の先生に心配をかけることもなければ、期待をされるようなこともなかった。

学級委員の下の副委員とは、そういう存在の象徴のようなものかもしれない。

ごく周辺の大人たちの期待に、表向きは応えながらも、いたずら好き、冒険好きの少年らしさ、子供らしさを持て余す。

学校内で頭が上がらないのは6年生の存在。だけど「最上級生である」という責任感がない分、小学校の6年間で最高に自由な時期であり、「自分が何がしたい」ということと「何ができて、何ができないか」と「何が許され、何が許されないか」ということの区別がつきながらも、少年の心は、いつもわがままで無思慮で、遠慮がなかった。

そんなのが小学5年生だろう

## 学校

---

ボクの通っていた小学校は、学区内では最古参で、100年以上の歴史を持っていた。幹線道路に面した校門から校舎までの間には50メートルほどの見事な桜並木になっていて、4月は桜の花びらが舞い散る中、学校に通うことになる。

校舎の裏手は高台になっており、栗の木などが自生している。ここには毎年毛虫が発生し、これに刺されると大きくはれ上がりひどい時には熱を出したりするので、そこには入らないようにと毎年、朝礼や学活（いわいゆホームルーム、学級活動）で注意が促されていた。

ボクは毛虫に刺されたことはないけれど、あのグロテスクな姿から、できる限り近寄りたくないと考えた。

どの生徒もそれは同じで、誰も進んで校舎の裏には行かなかつたし、子供の興味を引くようなものは、何もなかった。

毛虫は時に、校舎の壁を伝って、窓から見えるところに張り付いていることもある。校舎の裏の窓は、虫が入らないように開けっ放しにすることはほとんどなく、毛虫が校内に侵入することはまずない。たまにはいたずら坊主が、校舎の裏から小枝に毛虫を乗せて女の子を追い掛け回すこともあるが、たいていは先生に見つかって、こっぴどく叱られるのがオチだった。或いはそんな遊びの中、毛虫はちょん切られるか、踏み潰されるか、子供が「おもちゃ」に飽きたときは、たいがいそういうことになる。

ボクはそれに参加することもなければ、とがめる気などはさらさらない。ちょん切られた毛虫は、すぐには死なない。死んだ毛虫の毛には毒があるから近寄らない。そしてつぶした毛虫の体液はそれを見る者に、なんともいえない嫌悪感を与える。できることなら見たくない。

## ビニールテープ

---

ボクのクラスには、男女あわせて30人〜33人くらいいて、男子のグループは野球やドッチボールをして遊ぶグループと「ごっこ遊び」や虫取りをしたりして遊ぶグループに分かれていた。普段は一緒に遊ぶことのないグループではあるが、いくつかの遊びでは行動を共にする。

いたずら、冒険、宝物

初夏のある日のこと、地元の少年野球チームで上級生との付き合いのあるKは、こんな情報を聞きつけた。

「学校の桜の木を上って塀を乗り越えていくと、桜堂の裏側にでるじゃん。そこには桜堂の倉庫になっている小屋があって、そこにはいろんな文房具が置いてあるんだぜ。で、普段はカギが掛かっているらしいんだけど、今、その扉のカギが壊れてて、小屋の中に入れるらしいぜ」

みんな話に夢中になった。

小学生にとって文房具家の倉庫というのはまさしく宝の山であり、普段入ってみたことのない塀の向こう側が

どんな風になっているのか、どんな宝物が眠っているのか。それが不法侵入及び窃盗という法律に触れると

いうことに、誰も気付いていないのか、気付いていても口に出さないのか

そして何よりもその情報の証拠としてKがみせたもの

「これが戦利品。他にもいろいろあったけど、お前らぜったいにあそこには行くなよって」

黄色いビニールテープ——上級生からもらったという

大人からすればどうとうことはない代物だが、しかし、昭和50年のあの頃、ビニールテープを持っている小学生というのは珍しかった。小学生が授業で使うことはなかったし、学校で使うはさみや三角定規をいれておく工具箱にセロテープはあってもビニールテープは入ってなかった。しかしそれがタダで手に入る。この黄色はなんて魅力的な色なんだろう。

「6年は石膏を持ち出したらしいよ」

石膏——図工に時間になんとか使ったことがある、水で溶かして型に流し込んで、乾くと石のように固まるやつだ。ビニールテープよりも石膏のほうがいい。しかし——

果たしてそんなことをして大丈夫なのだろうか？

「えー、やべーんじゃねー」

そう、確かにそうだ。これは「ヤバイ」

でも、ものを取るかどうかは別としても、こんな身近に、そんな場所があるなんて知らなかった。冒険心——いってってみるだけなら、覗いて見るだけなら、触ってみるだけなら……

## 放課後

---

「行こうぜ」

S夫が言い出した。

「やべーよ」

U治は慎重だ。

「石膏だよ、石膏」

G朗はやる気だ。

「知んねーぞ。6年にバレたら半殺しだぜー」

K山はビニールテープの自慢がしたかっただけで、用は「ここだけの話」を誰かにしたかっただけなのだ。

盗みはヤバイ。K山はクラス一番の悪ガキだが、分はわきまえている。本当にヤバイことには自分で手を出さない。

ボクもヤバイと思う。興味はあるけど、それはできない

結局その話は一旦そこで終わったが、どうやら冒険好きのG朗とS夫、それにいつもこいつらにつるんでいるU治そのあともいくかどうかでこそこそと話をしてる。

6時間目の授業が終わって帰り、塾や習い事があるやつはさっさと帰ってしまう

ボクは掃除当番。同じ班のU治とT字ほうきで教室の床をはく。

女子は黒板と机の上をきれいに拭いてる。

G朗とS夫はU治を廊下で待っているようだ。

なあ、もしかして、このあと行くのか？

ボクはU治に聞いてみた

「前にS夫がボールを塀の向こうにいれちゃって、塀を登ろうとしたら、用務員のおっさんに見つかって入れなかったんだって。もう、ボールは見つからないと思うけど、ボールを取りに入ったってことにすれば、まあ、誰かに見つかっても平気じゃないかってS夫は言うんだけど……」

クラスの中では誰よりも好奇心が旺盛なU治がこの話に乗り気ではないのは、U治に勇気がないからではない——U治の父親はPTAの役員なのだ。厳格な父親であり、こんなことがバレたら6年生に見つかって半殺しになるどころではすまないということは5年生であれば誰でも容易に想像ができる話である。

「なにしてんのー、はやくしてよー」

班長のN子は見た目はかわいらしいのだが、生意気で、常に男子と女子の争いの中心にいる女だ。

先生にいつつけてやる

なんどこの言葉に脅されたことか！

「うっせーなー、すぐに終わるよ！」

U治はクラスの中では小柄で、運動能力にすぐれ、また、モノマネをしたり人を笑わせる才能に恵まれていた。

U治はケンカになりそうなきたない言葉を使っても、相手を怒らせないように、すぐにおちゃらけてみせる

U治UはN子の方に向きを変え、頭を激しく左右に振りながら、T字ほうきを激しく動かして「おいそぎですか レレレノレー」と得意のマンガのモノマネを始めた

「もー、ふざけないでよ！」

言いながらN子は思わず噴出していた。

「U治まだかよ、早くいこうぜ」

教室の後ろの扉からUが顔をのぞかせて、U治をせかした。

「あー、もー、わかったから、手伝ってよ」

U治は要領がいい

U治のおかげで、掃除を早く終わらせることができた。U治が遊び始めると、N子が怒鳴るまで、U治はそれをやめない。

掃除が終わるとG朗、S夫、U治は走って教室を出て行った。

「もう！廊下を走ったらいけないんだからね！」

N子の声は、彼らには届いていないようだった。

## 侵入

---

ボクはU治のことが気になって、少し心配になっていた。

無茶しなきゃいいけど

ボクはランドセルをしょって、教室を出た。

下駄箱で下履きに履き替えて、校舎を出るとU治たちが校庭の端ののぼり棒のあるところにランドセルや手提げカバンを置いているところだった。校舎の窓から校庭は一望できるが、桜並木は登り棒のある校庭の端から始まっており、校舎からは死角になる。放課後に校庭で鉄棒やのぼり棒の練習をする生徒はだいたいあそこにランドセルやカバンを置いていた。

ちょっと様子を見てこよう。N子とかにみつかったら、それこそあとで何言われるかわからない。

誰にも見られないように壁をよじ登ることはそれほど難しいことではない。

桜の木を登っていけばボくらには造作もないことだった。

だが、1人ならともかく3人が登るのは目立つ光景だし、帰りに見つかる可能性がある。

あー、もー、危なっかしいったらありゃしない！

「オレが見張っているから、すぐに戻れよ！」

「サンキュー！戻るときは向こうから合図するから！」

G朗はそういって、すばやい身のこなしで桜の木をよじ登り壁に飛び移った。

U治とS夫もこれに続く。

このとき、ボくらは開けてはならない扉（＝恐怖の入り口＝）に手をかけたことにまだ気付いてはいなかった。

それは些細ないたずら心、子供の純真なる好奇心。

誰かの持ち物を盗むとか、家の中に忍び込むとか、そんな恐ろしいことではなくて、まだ見たことのない場所が、こんな学校のすぐそばにあって、そこには新しい発見や宝物があるかもしれない。

壊れたカギが修理されたら、こんなチャンスはそうはないのだ。

そう、ボくらには、こうする以外に他はなかったのである。

小学5年生のボくらには。



## ルール

---

小学校の校門から続く桜並木。

その並木にそって苔むしたコンクリートのがっしりした壁が並び立つ。

学校の校門の横の桜堂は、学校御用達の文房具店で、学校の校章をはじめとして、書初めに使われる半紙や絵の具、クレヨン、画用紙、工作用紙など、様々な商品を扱ってる。この学校に通う生徒は一度はここで買い物をしたことがあるはずだ。この文房具店桜堂は、店のたたずまいからみても、かなり歴史のある文房具店で、気のいい老夫婦の営むこの店を悪く言うものはいなかった。最近少し、耳が遠くなってきてはいるようだが。

そんな気のいい老夫婦を困らせるようと思ったわけではない。そんなことを考えている奴はいなかったと思う。

ボクらはただ、普段は開けることにできない扉がそこにあり、その中を覗いて見ただけだった。

冒険心と好奇心だけがボクらを突き動かしていたし、そこまで行った証拠品として、何かそこから待ちだしたいと思っていた。

この話を耳にしたときから「こうなること」は「決まったこと」なのだ

もし、この行為が「いけないこと」であれば、行為の途中で、誰かに見つかるに違いない、怒られて未遂で終わる。

あるいはもうカギが修理されて扉はかたく閉ざされているかもしれないし、持ち帰れるようなものがないかもしれない。

いずれにしても、本当に「やってはいけないこと」を小学生のボクらがやろうとしても、そう簡単にはいかないもので、世の中のルールや仕組みはそんな風に成り立っているの。

それに成功したからといって、ボクらが味をしめて、もう一度それをやることはない。これはいたずらの数々をこなしてきたボクらの経験から学んだ法則であり、ルールだ。

やってはいけないことは、やってみないとわからない

ただし慎重に、そして、一度だけ

ボクらはこの日、いたずらの法則とルールに従い、見事に冒険を成功させた。

G朗、S夫、U治

3人が桜の木を登り、枝を伝わって、高さ2メートルほどの壁の上にかがみながら、向こう側の様子を注意深く覗いている。

## 悪戯

---

「よし、行くぞ」

G朗の掛け声とともに3人の姿は壁の向こう側へと消えていった。

ボクは校舎のほうに気を配りながら、誰かこちらのほうに来ないか、ハラハラしていたが、この日の運はボクらに向いていたらしい。

「おい、大丈夫か？」

G朗の声が壁の向こうから聞こえた。

「急げよ、早く！」

まるで刑事ドラマか、何かのようだった。あるいは土曜の8時のコントか。

「これ受け取ってくれ」

壁の向こうからこちら側に何かが投げ込まれた

「戦利品だ」

G朗のの声だったか

「これも」

今度はボールが投げ込まれた。

S夫のボール？だが、投げ込まれたボールは1つではなかった。

それはあまりにもあっけなく、そっけなく、味気のない、期待していたよう冒険ではなかった。

「やばいと思ったから、これしかもってこなかった」

彼らが戦利品と言っていたのは透明のビニールに包装されたガムテープだった。

ビニールテープに対抗してのことなのか、少しだけそれを上回るもの——実にシンプルな選択だ。  
。

「中はどうなってた？」

ボクはG朗に聞いてみた。

「とにかく、ランドセルに隠さない」と

U治は、不安げな様子だ。確かにここで誰かに見つかると厄介だ。

ランドセルを校庭に置いてきたのは失敗だったか？

ボクらはガムテープとボールを上着の下に隠して、急いでランドセルがおいてあるのぼり棒のところまで行った。

校庭には何人かの生徒がボール遊びをしたり、鉄棒や、ゴムとびをして遊んでいた。

その中にN子の姿を見つけると、これは、ここでランドセルを開けるわけにはいかなかった。

「おい、どーする？」

S夫はN子が大の苦手だった。

漢字の小テストの時に、机の上にこっそりと答えを書いていたのをN子に見つけられ、先生にはチクられなかったものの、60点以上を取ることができずに居残りをさせられたことを今でも根に持っているようだ。

学校から出るという選択肢もあったが、ここから大人の目に付かないところまでは、それなりに歩かなければならず、ボクらの頭の中は、一刻も早く、ランドセルにガムテープをしまいたい、或いは、しっかりと手にとって眺めたいという気分侵食されていた。

## 任務完了

---

「今日は木曜日だから校舎の裏なら誰もこないよ」

U治はゴミ捨てるの係りで、時々学校の裏になる焼却炉が何曜日に使われているかを知っていた。

「よし、行こう」

ボクらは校舎の裏に行くのに

「お前、忘れ物するなよー」とわざとN子に聞こえるように言いながら、校舎の中に一旦入ってから、校舎の裏へと回りこんだ。こういうことをしているときは本当に楽しい。まるで秘密作戦を実行しているようなワクワク感がボクらの脳を支配していた。こんなときのボクらは最高である。

校舎の裏は、裏の高台との間の薄暗い空間で、どこかじめっとしているし、ひやっとしている。校舎の廊下側からは当然丸見えではあるが、木の陰や、物置の影など死角はいくらでもある。ボクらはリヤカーや壊れた机や椅子といった粗大ゴミが置いてある物置の裏側に集まった。

「やべー、超こえー」

U治がいつもの調子でおどけながら、目を輝かせていた。

「はやくしまおうぜ」

S夫はN子が気になるのか、意外とこういうときはオドオドするタイプだ。

ボクらは服の下からガムテープを出して、ランドセルをあけた。

「すげー、ビニールテープより高いんじゃねー」

G朗はK山のグループから、多少バカにされていた。

跳び箱や鉄棒、縄跳びといった運動は得意なG朗だったがボールを使った遊び、特に野球は大の苦手だった。

彼にはキャッチボールをする父親や兄弟はいなかったのである。

ドッチボールでは巧みな身のこなしで、最後まで残る運動能力を持っていたが、野球となるとバットにボールを当てることができなかった。G朗のバットを持つ手は左右逆だったので、K山はそれを大声で笑った。

以後、バットを左右逆を持つ構えは「G朗打ち」と名づけられた。

「なあ、なあ、中はどんな感じだった？」

「空き地みたいになってて、なんかいろいろ物が置いてあったけど、古い小屋みたいなのがあって、扉のカギが壊れてるんだけど、開けようとする音がするから。。。ちょっとだけ開けて手が届いたのがこれなんだ」

ボクの質問に興奮した口調でG朗が答える。なるほど

「あとなんかよくわからない工具とかあったけど、あればヤベェじゃん、なんか高そうだったし」

S夫が付け足した。

「いたずらの域」を超えないこと——これも大事なルールである。

## 次のステージへ

---

ボクらはしばらくガムテープを眺めていたが、それをランドセルにしまった。以外にかさばる。両面が開くようになっている筆箱を使っていたU治やS夫はランドセルの中身をいったん全部出してうまく隙間を作らないとガムテープは入らなかった。ボクとG朗の筆箱は缶ペンケースだったのでそのまま入れることができた。

帰りかけたとそのとき、物置の壁にうごめくものをU治が発見した。

「ゲゲッ！」

U治がいつものおどけた口調で驚きの表現をする。

U治が見つけたのは毛虫だ。

「ギョエー！」

U治のテンションがあがる。よく見ると毛虫は1匹だけではなく、壁のあちこちに張り付いていた。

大きさは2センチ程度の小さなものだった。

「大群、大群、毛虫の襲来だあああ」

G朗も調子に乗る。

ボクは気持ち悪がった。一度にこんなにたくさん見るのはもしかしたら始めてかも知れない。そして嫌悪感。。。この世に存在してはいけないものなのではないか？

「退治しないと学校が占領されちゃうぞ」

S夫——いったいぜんたい、なにを言うのか——しかし、小学生の発想はそういうものである。

次のゲームはスタートした。

一つのミッションをなんなくクリアした達成感が更なる難易度の高いミッションへと使命感を燃え上がらせる。

もはやボクらの目には、毛虫は害虫であり、ボくらには「悪戯をした償いに、何かいいことがしたい」という気持ち——害虫を退治することで、どこか『道徳的な後ろめたさから逃れられるのではないか？』と、そういう思いに駆られていたのに違いない。

「そうだ！いいこと考えた！あれを使おう！」

S夫は先ほど苦労してランドセルにしまったガムテープを取り出した。

ボクらが手に入れたもの・・・気のいい老夫婦の営む、みんなに愛される文房具店の倉庫から盗み出した戦利品——小さな虫が張り付いたらまず生きては、はがれられない強力な粘着力。ガムテープと道徳を犯した罪への意識。

そのまま家に持ち帰るはずの二つを使うことによって、ボクらは罪の意識を置き去りにできるのだと考えたのかもしれない。

少なくともワタシはそう確信してる。

かくして絶対の正義を信じて疑わない小学生による小さな生き物の大量虐殺が始まった。

## 大量虐殺

---

盗み出したガムテープをなにに使うか？

そもそも小学生にガムテープは必要ない。

セロテープならいろいろと使い勝手はあるし、当時発売されて話題になった貼っても透けてテープで貼ったことがわからなくなるテープであれば欲しくてたまらない。この商品は表面につや消しの加工がなされており、紙に貼るとテカテカですぐに見分けられるセロハン製のテープとちがいが、張ったときにテープの存在が見えにくい。

しかも必要がない上に盗んだガムテープであれば、なおさらのことである。持って帰って親に見つかれば、悪事の全てがバレてしまうかもしれない。下手をすれば学校を挙げた問題にもなりかねないし、あの気のいい老夫婦にも知られてしまう・・・あの店で買い物ができなくなる。

みんなから忌み嫌われている毛虫を退治するのにガムテープは実に有効的な手段に思えた。

毛はテープに張り付いて飛ばないし、小枝に引っ掛けて使えば、距離を置いての「攻撃」が可能である。

しかもつぶしてしまったときのあの体液——おぞましい液体を見ないですむ。

ボクらはやっきになって毛虫を探し出し、次々に攻撃をした——一方的な虐殺。

ヤツら、木の葉っぱを食べる悪いやつらだ、みんなから嫌われてる。ボクらはみんなのかわりに害虫を退治しているんだ。これはいいなんだ。正義なんだ。

そう、学校みんなのために・・・だから、このガムテープはすごく、みんなの役に立つんだ。きっとあの気のいい老夫婦も害虫退治に使ったと知れば許してはくれないまでも、少しはわかってくれる。そう、きっとわかってくれる。

戦況は圧倒的なものだった。

ヤツらはのろまで間抜けだ。用は触らなければいいのだ。弾薬はたっぷりある。

ボくら3人力をあわせれば、こんなヤツら、いちころだ！

もし、毛虫がつぶれて屍骸になる様をみていたら、ここまでのことはできなかつたかも知れない。ガムテープに貼り付けて毛虫を見えないようにして、焼却用のゴミいれの中に捨てる。

毛虫の死の瞬間はみないですむ。そのことが、ボくらが生き物の命を奪っているという事実から目を背けさせることになり、30分もしないうちに50匹以上の毛虫を退治した。

毛虫は黒いモサモサの大きなやつと長さ2センチから3センチくらいの毛が少ないが地肌がグロテスクな模様をしているもの——あまり毛虫に詳しくはないが、これがチャドクガという種類で、この毛虫の毒がかなりやっかいなものだと、大人になってから知ることになる。



大きいヤツはだいたい単独で行動しているようで、それほど数は見つからなかったが、チャドクガは一つの樹木に大量に発生していることがある。大量の毛虫の群がる姿はなんとおぞましく、まがまがしいことか！

ボクらは自分たちの正義を疑う余地はまったくなかった。

## 戦果

---

これだけやれば、もういいだろう。

S夫はすっかり英雄気取り。U治はこのゲームに飽きたらしく、いつもの公園に行こうと言い出した。

かくして毛虫狩りは終わった。

ボクらは入念に犯行現場をかくし、毛虫の張り付いた戦果といっしょに、まだたくさん残っているガムテープを焼却用のゴミ置き場に放り込んだ。

これですべて終わり。

なにもなかった。

これでプラスマイナスゼロだ。

初夏の夕方は一番長い。まだ暗くなるまではだいぶ時間がある。U治の提案を入れて、公園に行くことにした。もう一つの戦利品。U治がなくしたカラーボールとふたつのテニスボールとふたつの軟式ボール。次はボールで遊ぼう。

校舎の裏から誰にも見つからないように下駄箱の方に入った。そこから校庭を覗くとすでにN子の姿はなかった。

すべては計算どおり、思いどおりである。

ボクらの勝利だ！

公園に行くには、校門を出て左に曲がり学校の敷地をぐるっと外回りして高台に上らなければならない。

当然に桜堂の前を通らないとならない。誰も口には出さなかったけど、心のどこかで、後悔のようなものが、ざわざわとこみ上げてくる。そんなはずはないのだ、そんなはずは……だってボクらは「悪いことをしたわけじゃない」いや、悪戯はしたけど、すごく悪いことを——こんなに後ろめたい気持ちになるような——そんなことはしていない。そう思っていたのに。

きっと、これから学校に通うたびに、こんなふうに、心の奥で何が騒ぐようになるのか？

その「ざわざわとするもの」に耳をかたむければ、ボクは聴きたくもない「良心の声」を聴くような気がして、だから、

ボクは、そしてきっとボクらは、その「ざわつき」を無視するしかなかった。

桜堂の前を頭を下げてボクらは小走りで公園へと急いだ。横目で店内を覗くと、そこにはいつもと変わらない店のたたずまいの中に、なにか文房具を買っている女子が、ちょうど気のいい老夫婦にお釣りをもらうところのようだった。髪の毛はほとんど真っ白で、黒目や白目がほとんどわ

からないような細く垂れ下がった目は、いつもニコニコと笑っているように見える。

桜堂の気のいい老夫婦はいったい、何人の生徒を知っているのだろうか？

100年を越す、歴史を持った小学校の横で、どれだけの生徒とこのようなやり取りをしてきたのか？

そのシワシワの顔はすべて笑顔によってできたシワであることは、小学生にも用意に想像ができた。

でも、ボクにはその細い目が、ボクらには違う表情にどこか疲れて、物悲しい表情に見えていた。

ボクはボクの世界が変わってしまったことに気づいてしまった。

ボクは、ボクらは扉の向こう側の世界に足を踏み入れてしまったのだった。

## 変わり行く世界

---

公園に行くには、校門を出て左に曲がり学校の敷地をぐるっと外回りして高台に上らなければならない。

当然に桜堂の前を通らないとならない。誰も口には出さなかったけど、心のどこかで、後悔のようなものが、ざわざわとこみ上げてくる。そんなはずはないのだ、そんなはずは……だってボクらは「悪いことをしたわけじゃない」いや、悪戯はしたけど、すごく悪いことを——こんなに後ろめたい気持ちになるような——そんなことはしていない。そう思っていたのに。

きっと、これから学校に通うたびに、こんなふうに、心の奥で何かが騒ぐようになるのか？ その「ざわざわとするもの」に耳をかたむければ、ボクは聴きたくもない「良心の声」を聴くような気がして、だから、ボクは、そしてきっとボクらは、その「ざわつき」を無視するしかなかった。

桜堂の前を頭を下げてボクらは小走りで公園へと急いだ。横目で店内を覗くと、そこにはいつもと変わらない店のたたずまいの中に、なにか文房具を買っている女子が、ちょうど店の人にお釣りをもらうところのようだった。髪の毛はほとんど真っ白で、黒目や白目がほとんどわからないような細く垂れ下がった目は、いつもニコニコと笑っているように見える。

この店主はいったい、何人の生徒を知っているのだろうか？

100年を越す、歴史を持った小学校の横で、どれだけの生徒とこのようなやり取りをしてきたのか。

そのシワシワの顔はすべて笑顔によってできたシワであることは、小学生にも用意に想像ができた。

でも、ボクにはその細い目が、ボクらには違う表情に……どこか疲れて、物悲しい表情に見えていた。

ボクはボクの世界が変わってしまったことに気づいてしまった。

ボクは、ボクらは扉の向こう側の世界に足を踏み入れてしまったのだった。

## ボール鬼

---

ボクらは後ろめたい気持ちから逃れるように、いつもの公園へと急いでいた。

曲がり角を越えるたびに、目的地へと近づいている安堵感とは裏腹に、微妙にいつもとちがう表情を見せる町並みに、ボクの意識は、すっかりと興奮状態になっていた。

普段は目に入らない町並みの闇。

灰色の部分はすべてくすんで見えるし、新緑に萌えるような緑も、どこかまがまがしさを含んでいた。

坂道を登りきり、この坂をしたから一気に自転車で駆け上げられるようになったのは小学校4年の夏休みだったか……公園はいつになく静かで、今日に限っては、同じ学校の生徒や小さい子供ずれの親子が砂場で遊ぶ姿もなかった。

子供の笑い声が聞こえない、静まり返った公園は、どこか無機質で、砂場の周りにあるコンクリートでできた動物たちが、まるで生き物の死骸のように見えた。

この公園はちょうど学校の真裏の高台の上であり、小さな子供が遊ぶための滑り台、ブランコ、砂場とどこにでもある遊具と、プロペラ飛行機を鉄のパイプで形どったようなジャングルジムがあった。砂場には野良猫のフンに時々大きなハエがたかっている。そのまわりにライオンやキリン、ゾウを象ったコンクリートのオブジェがある。ボクらはライオンからキリン、キリンからゾウへと飛び移る技術を競った。

遊具のある、日当たりのいい遊び場と、学校の裏手へと続く散策路は、銀杏や桜の木が植えてあり、夏であれば風通しもよく、涼むのにちょうどいい。

ボクらは木が生い茂るところには行く気になれなかった。当然である。

あれだけの毛虫を先ほどまで、躍起になって「退治」してきたのである。

ボクらはS夫が塀の向こうから取り戻したカラーボールでキャッチボールをはじめたが、いつしかボールのぶつけ合いになり、そのボールを使った鬼ごっこにやがてそれは発展した。

ボールを投げる、よける、ぶつけられたら、鬼は交代。シンプルだが、公園には適度な障害物があるので、実にスリリングだ。そして何よりボクらは抜群に運動神経が発達していた。誰も上れそうもない、壁や、木、飛び越えられないような幅の段差、潜り抜けられなさそうなわずかな隙間もお手の物だった。

野球やドッチボールではたいした活躍できないけど、こういうことならクラスの誰にも負けない自信があった。

それにボクらは他の誰よりも公園や神社の隅々まで知り尽くしている。木の上から眺められる

風景、どこの木にどの季節にどんな花が咲き、実がなるのか、どんな昆虫がどこにいるのか。  
トイレの屋根の上はどうなっているのか、公園のフェンスのどこに隙間があるのか。

## ヤマンバ

---

この遊び——ボール鬼の結末は大体決まっている。

ボールが間単にはとれないところに転がってしまい、今度はそれはとることに遊びの主体が変わっていくのである。

このときはU治が鬼のときにそれは起きた。

「あれー、ボールがないなあ」

U治の投げた渾身の一球はS夫の肩口から首筋をかすめって散策路の木々の中に入り込んでしまった。

「あー、あー、なくすなよー、ちゃんとさがせよなー」

S夫は口を尖らせて——こんなとき、S夫はいつも口を尖らせる。

「へんなところに投げるなよなあー」

みんなでボールを捜しに散策路へと入っていく。

散策路の地面にはほとんど日が当たらない。それだけ木々の葉は太陽の光を独占しようと懸命に空に向かって伸びており、コンクリートで舗装されていない部分の土は、いつも湿った状態である。

夕方も4時半を回ってだいぶ空気がひんやりとしてきている。

散策路には行って、みんなあることに気づいた。だれもいないと思っていた公園。しかし、そうではなかった。

ヤマンバがいたのである。

ヤマンバ——いつからかそう呼ばれているのか、それは、ボクらがこの公園で遊ぶようになってからなのか、その前からなのか、ボクらの小学校に通う子供ならたいがい、誰でも——少なくとも男の子は知っている存在。

これといってボくらに対して何かするわけではない。子供にとって、ニコニコと微笑みかけてくれない老人は、どこか畏怖の存在であり、いつも同じような農作業でもするかのような格好で、公園を歩き回る様はどこが不気味であり、子供のころ、物語で読んだ旅人を泊めては殺して食べていたというヤマンバという妖怪のイメージとすっかり重なってしまうのであった。

「やばい、ヤマンバがいるじゃん」

G朗が最初に口を開いた。

「ガビーン、やばいのだあ」

U治はいつもの調子でおどけた。

「早くボール捜してよ」

S夫はせっかく取り返したカラーボールをなくしたくないようだ。

ヤマンバは木の根元にしゃがみこみ落ち葉をスコップのようなもので掻き分けて、何かを探しているようだった。

聞いた話では、食べられるキノコが、ここに自生しているという噂があった。

だけど毒キノコもあるからむやみに触らないようにと、理科の先生に注意された上級生がいると、K山がいていたのを思い出した。K山の上級生情報はおよそ信頼できるものだった。



## 毒キノコ

---

「毒キノコでも探しているのかなあ」

G朗は、もはやボールを探そうとはしておらず、ヤマンバが何をしているのかが気になってしょうがない様子だ。

ヤマンバはこちらのことを気付いているのか？

公園で大声で遊んでいたのはボクらしいなかった。向こうは当然に気付いているだろう。

だけど、ヤマンバはこちらには気付かない様子で、黙々と落ち葉を払っては何かを探しているようだった。

「あった」

U治がカラーボールをみつけたようだ。

「なに一、ギョギョギョー」

U治の漫画のキャラクターの物まねは、ほぼ完璧であり、あのキャラクターにモデルがいるとすれば、きっとU治に似たやつに違いないとS夫とG朗と話したことがあるほど、U治のモノマネは完璧だった。

「なんじゃ、このキノコは！毒キノコ発見！」

S夫の青いカラーボールはオシロイバナの枝の下にあり、そこにはなんとも毒々しい黄色いキノコが生えていた。

「これ、毒キノコじゃねーか、そのボールやばいんじゃないの」

いつの間にかG朗も寄ってきていた。

「だって、どーすんのさ」

S夫が苛立ちを隠せない様子で口を尖らせる。

「平気だよ、洗えば」

ボクはそうやってS夫を慰めようとしたが、大丈夫だという根拠はなかった。だが、触っただけでどうにかなるような毒性の強いキノコなど特撮ヒーローの世界にしか出てこないのだとわかるようにはなっていた。

小学5年生なのだから。

S夫は口を尖らせながら足元に落ちていた小枝を拾いカラーボールをかき出そうとした。

「うわー、えんがちょー」

U治は両手の人差し指と中指を絡ませて「バリアのポーズ」をした

U治は時と場所をわきまえることをもう少し学ぶべきだと、この頃からボクは思っていた。

S夫はすっかりへそを曲げ、さらに口を尖らせた。

「お前が投げたからいけないんだろー」

S夫の目は少しなみだ目になっている。ここまで興奮しているS夫を見たことはない。よほどのカラーボールがお気に入りだったのか、あるいは毒キノコが怖かったのか。

「触るんじゃないよ！」

4人とも一瞬凍りついた。

雷にでも打たれたかのように全身に緊張感が走り、髪の毛が逆立つ感覚。

ヤマンバが僕らのすぐ後ろにきて、スコップを片手にボクらをにらんでいた。

## 逃走

---

最初に駆け出したのは、G朗だったか？それともU治だったか。

S夫は驚いた拍子にボールを落としてしまいそれを拾うのに手間取った。

ボクは先に走り出したG朗とU治を目で追いながら、S夫がボールを拾うのを待ってから、駆け出した

そのうち2番目を走っていたU治が木の根元に足を引っ掛けて、見事に転倒した

「いってーっ！」

みると右のひざがすりむけて滴るほどに血が流れていた。

U治は目に涙をいっぱい浮かべ、必死にこらえている。

ボクらはいつも、無茶なことをしているので、ヒザをすりむくなんて、日常茶飯事だったが、これはやばかった。

血が止まらない。

「これ、はやく消毒したほうがいいよ」

G朗が心配そうにUを覗き込む。

「バチが当たったんだよ」

S夫がボソッという

「そんな、ちょっとからかっただけじゃ……」

「そうじゃないよ」

ボクのことをS夫がさえぎる

「そのことじゃないよ……」

みんなすっかり意気消沈してしまった。

みんなわかっている。桜堂から「盗んだガムテープ」そしてそれで毛虫を「大量虐殺」したこと。

罰が当たって当然である。

「今日は、もう、帰ろう」

U治はもう涙をこらえられない状態だった。

U治の方を抱えて起き上がらせると水道の所まで行って、とりあえず傷口を洗い流した。

## 夕焼け小焼け

---

公園の水道は水を飲む蛇口が上向きになって、細く水がでるところと、手や足を洗えるように蛇口の先が回転する普通の水道がついている。

U治は普通の蛇口のところにしゃがみこんでヒザを曲げ、ヒザ小僧を流水にあてた。

「いっつうううう」

U治は必死にこらえている。

ヒザは泥がこびりついている。きれいに洗い流しておかないと化膿してしまう。

きっと明日の朝には赤チンまみれになっているだろう。

ふと、傷を洗い流しているU治の背中にうごめくものが入った。

「あっ！」

思わずボクは大きな声を出し、飛びよけた。

ボクの視線の先には、毛虫が一匹、U治の背中を首筋めがけて這っているところだった。

「U治、動くなよ」

G朗が、U治の腕をつかむ。S夫はすっかり怯えている様子だ。

「なに？」

U治はかたち鬼の時のように、見事に凍りついた。

「今取るから」

ボクは小枝を拾ってU治の背中を這う毛虫を払いのけた。

毛虫はうねうねと地面をのた打ち回っている。

U治は悲鳴を上げた。

「ぎいいいいいい、あああああ」

それはあのマンガのキャラクターをまねた擬音ではなく、彼の本気の悲鳴だった。

ボクらはもはや、想像せざるを得ない。

これは毛虫の復讐なのかと。

地面に落ちた毛虫は、まっすぐにボクに向かって這ってくる。

ボクははじめて虫の視線を感じて背筋に震えを覚えた。

怖い

そのとき突然、音楽が鳴り出した。

ぐあーん がーが ぐあーん ぐあー があがー

ぐあーん がー

——夕焼け小焼け——この地域で5時半を知らせる時報として、公園などに設置してある緊急放

送用のスピーカーからこの音楽が流れるのである。初夏だというのに、ボクらは4人とも鳥肌を立てていた。

「あせったー、もう帰ろー」

G朗だったか、U治だったか.....S夫は口を真一文字に結んだままだった、もう尖っていない。

ボクらは毛虫をそのままに家路につくことにした。

もう、殺すのは怖かった。

そしてその日の夜、ボクは生まれてはじめて恐怖を知ることとなる。

ワタシは、その日、家に帰ってから布団に入るまでのことを、ほとんど覚えていない。

## 小さなシミ

---

怖いテレビや映画を見たとき、決まってボクは眠れなくなる。

特にそれが闇に潜む怪物や幽霊の話であればなおさらである。

東海道四谷怪談。

ワタシは今でもあれを好きにはなれない・・・怖いのだ。

欲に目がくらみ、女を裏切る主人公。

彼は邪魔になったヒロインを知り合いに頼んで薬を与え毒殺する。

主人公によって謀殺されたヒロインは怨霊となって主人公を追い詰めていく。

ついに主人公は気が触れてしまい・・・

扉を開く、振り返る、主人公の死角から次々と襲い掛かる幽霊の演出に、ボクはトイレにいけなくなるほど恐怖した。

今でもワタシはシャワーを浴びるとき、ふと、背中にいやな気配を感じることがある。

そしてあの日の夜も・・・

ボクは布団に入ってもなかなか寝付けずにいた。

隣からは弟の寝息が聞こえる。

両親や弟はもうすてに眠ってしまっているようだ。

外では風に吹かれてときより風鈴の音が響いていた。

ボクは目を瞑っているのがつらくなり、ただ、ぼんやり天井を眺めていた。

我が家では完全に電気を消さない。豆電球のオレンジ色のやわらかい光が、天井から降り注ぎ、あたりを薄暗く照らしている。

ふと、なにか薄明かりの中であらうごめくものを見たような気がした。

・・・なんだろう？

天井のちょうど自分の真上。顔の位置よりも首から胸のあたりになるか？

よく見てみると、それは小さなシミのようで、木目の模様のようなようで、或いは、虫のようで・・・

・・・虫？・・・蜘蛛か？・・・ハエか・・・ゴキブリか？

あるいは・・・毛虫？

公園でU治の背中から払い落としたあの毛虫・・・あれはボクをめがけて這っていた。

それは間違いない・・・だいたい、毛虫に目があるのか？ボクだと認識できるのか？

単なる偶然、たまたま進行方向にボクがいただけじゃないか？

たまたま・・・そう、たまたま、U治の背中に、何かの拍子で木から落ちててきたんだろう。

タダの偶然に決まっている。

天井の板に今までまったく気にならなかった小さな模様か或いはシミのようなもの・・・いつからあったのか、全くわからないけど、でも、ボクは考えてしまった。

あの公園で振り落とした毛虫が、ここまで追いかけてきたのではないか？という疑問・・・「恐怖」を。

もはやボクにはそのシミを無視することはできなくなってしまっている。瞬きをするたびに、少しだけボクの顔に向かって天井を移動しているように思えてしまう・・・そんなはずはないのに。

- ・・・いや、実際少しずつ動いている。
- ・・・いや、それは錯覚だ。
- ・・・でも、ほら、こっちの木目と比べて、もう少し下のほうに、最初は見つけたんではなかったか？
- ・・・いや、ちがう、そんなはっきりとは覚えてないし、ちゃんと位置を確認したりしてない。
- ・・・今、はその位置を正確に確認している。
- ・・・大丈夫動いていない。
- ・・・動いていないが、少しだけ、大きくなってやしないか？
- ・・・うん、そんな気がする。
- ・・・いや、そんなはずはない。
- ・・・だって、大きさを比べるようなものは周りにはないから、それもただの錯覚。
- ・・・ほら、こーして手を伸ばして、自分の指の大きさと比べてみればわかる。
- ・・・うん、時間がたったらもう一度やってみればいい。
- ・・・きっと大きさはかわっていないさ。

ボクは冷静だった。

- ・・・大丈夫、ボクは冷静だし、ちっとも怖くなんかない。
- ・・・幽霊の正体なんて、だいたいそんなもの。UFOだって、ほとんど錯覚なんだから。

目を閉じていたのは、多分1分にもみたなかったに違いないが、ボクの中では、それ以上の時間、たっぴりと事実を検証するのに足りる時間、目を閉じていた思っている。

ボクはなんの恐れもなく、目を開けて、あの忌々しい模様の大きさを測ろうとした。

だが、そこに、さっきまであったはずの模様はなくなっていた。

まるで部屋の中の闇の中に溶け込んでしまったかのように、姿を消してしまっていたのだ！

ボクは、ボクは、ボクは、



「恐怖」した。

## 存在の証明

---

どんなに目を凝らしてみても、どこを探してみても、それはもう「そこにはなかった」。さっきまで、どこかぼんやりとしていたけど、それでも確かにそれは「そこにあった」

「あったもの」が「なくなった」のか？

「あったもの」が「見えなくなった」のか？

「なかったもの」を「見ていた」のか？

「見えないもの」が「見えていた」のか？

「なかったものが見えていた」と「あったものが見えなくなった」では、現時点においては同じ状況ではあるが、まったく違う「将来の予測」がなり立つ。

もし、「あったものが見えなくなった」のであれば、それはボクにみえないところに存在し、つまりはボクのすべての死角にそれは潜んでいる可能性があるということである。

「なかったものを見ていた」のであれば、それは「なかった」のだから、そもそも存在しないものということだ。

何故それが見えたか？はいくらでも理由がつけられるし、極端、もう見たくなければ、目を瞑り、寝てしまえばいい。

しかし、「あったものが見えなくなった」というのは、ボクの視界の及ばない遠くへ行ってしまう、時間軸では存在するが、位置的には存在しない状態であればいい。が、しかし

それを今、確認することはできない

解決をしてくれるのは、このまま朝までそれを見ることができないという、観測による確認。

「見えない」ということは「ここにはない」ということを証明するしかない

だけど・・・だけど、だけど

もし、ボクの死角にそれが潜んでいるのなら、ボクはどうすればいい？

そんなことを考えているうちに、ボクの五感の感度は最高値にまで高められていった。

些細な音、台所で旧式の冷蔵庫がぶーん、ぶーんと唸る音

パッキンが緩んだ水道から水滴が滴り落ちる音

めざまし時計が時を刻む音。。。カチ、カチ、カチ、カチ・・・チカ、チカ、チカ、

チカ・・・

あたりにはシーーンという空気が張り詰めた音  
やがてそれはキーンと音量があがってくる

どんなに耳をすましても、どんなに目を凝らしても、今はその存在を確認することはできない。  
あの黒いシミのような、模様のような、あれはなんだったんだろうか？  
ボクは、言い知れぬ恐怖を感じながらも、それがなんであるかを確かめずにはいられなくなっていた。

## 存在の観測

---

ボクは観測を始めた。

時計をみる。。。11時20分。。。異常なし

11時30分。。。外で猫の鳴き声？

11時36分。。。誰かが寝返りをした。。。たぶん父だ

11時45分。。。遠くから電車の走る音

11時51分。。。もうすぐ12時。こんな遅くまで起きているなんて、親にばれたら怒られるな

11時58分。。。12時になったかとおもったけど、12時になったらもう寝よう、眠れるなら

ボクは頭の中で、120秒をイメージした。

きっとそんなことを数えているうちに寝てしまうだろう。

だって、いままで、成功したことはないから。

しかし、期待に反して、ボクは長い針と短い針が天井をさす所をみた。

ボクは時計の針に促されるように天井を見た。

「それ」は一瞬ボクの視界に入った気がした

「それ」はボクの足元へ落ちてきた。。。ように見えた

次の瞬間、ボクは頭のとっぺんから、つま先まで、電気が走るような衝撃をうけた。

ボクの右足のスネのあたりに何か動いている！

ああ、そうなのだ！

ボクは「あったものを見ていた」のだった！

ボクは正しかった！

ボクは間違ってたかった！

ボクは・・・ボクは、ボクは！

ど・う・す・れ・ば・い・い・の？

## 搜索

---

あれは、あれは、あのとき、あそこに、あったんだ

散文的ではあるが、それは確実な一つの結論「存在」が観測され「存在」が証明されたわけだ。ひとつの問題は解決された。しかし、それは期待した結果ではなかったので、ボクは次の問題を解決しなければならない。

第1の問題・・・あれは、なんだ？

第2の問題・・・で、どうすればいい？

そしてボクの優先順位は、第2の問題・・・つまり、どうすればいいか？どうすれば被害を受けずにすむか？どうすれば逃げられるか？ということである。

あれがなんでもかまわない。。。まず、大事なことは、ボクのスネの上。。。ありがたいことにあれが降ってきたのは、素足ではなく、寝巻きと薄手のタオルケットの上であり、たとえあれが、「よくないもの」であっても、ボクはタオルケットを跳ね除けることで、今の状況からは脱することができる。

しかし、同時に、あれが何であるか？を確認する術がなくなる可能性を含んでいる。

あれは逃げてしまうかもしれない、そして、どこかボクの死角に潜み、結局ボクは眠れない夜を迎えることとなる。

ボクは、第2の問題を解決するためには、やはり第1の問題を解決しなければならないということを知らされた。

あれをこの目でみて「何であるか」を確認しなければならない。

ボクは恐る恐る、顔を起こして、あれが降ってきたあたりを覗き込もうとした、慎重に、足が動かないように、あれに気取られないように・・・そーっと、そーっと。

豆電球の薄明かりでは、いささか心もとないが、それでも暗闇よりかは、はるかにましである。オレンジ色のぼんやりとした明かりに照らされ、暗がりになれたボクの目になら、あれは見えるはずだ。

しかし、どんなに目を凝らしても、そこには何もない。

それらしき姿が見えないのだ。

タオルケットは白地に藤の花の模様が描かれており、黒いものが乗っかっていれば、こんな薄明かりの中でも十分に識別できるはずだと思った。

にもかかわらず、あれは「そこにはいなかった」。

だが、しかし、そうなのだ、今、そこに居ないというだけで、正しくは「そこに居たはず」とい

う状況。

既にそこから動き出し、どこか「ボクの死角」に逃げ失せたのか。

いや、そもそも「あれ」は、一度はボクの視界から消えて見せて、そして時計をみた一瞬後にどこからともなく現れて、ボクの足元に降ってきたというのは、間違いがない。

## 決心

---

ポタン！というよりはポタン！という感じか・・・質量はさほどないものである。

まるで虫？

ゴキか？

ゴキブリはいやだけど、まあ、やつなら墮ちたようにみえてボクの死角で飛んだのかもしれない。

そういう経験がないわけではないが、それはそれで、あまり気持ちのいいものではない。

まあ、それなら、別に噛み付くわけでも刺すわけでもない、ただ、ゴソゴソとして気持ちが悪いだけだ。

時計に目をやると、時間はたったの2分しか過ぎていなかった。

ボクには少なくとも5分はたっており、感覚的には7～8分だったので、5分前後だと冷静な予測を立てていた。

ボクは決心した。

ボクはそれがゴキブリだと決め付け、タオルケットを足で思い切り上に向かって蹴飛ばし、身体を起き上がらせて、あたりを見回した。

そこには横で寝ている弟や妹、父と母の姿があるだけで、時計の音以外は何もしない。

静寂した闇の水面からボクの上半身だけが浮き上がり、ボクを中心に波紋となってざわめきが広がっていった。

そのざわめきに気付いたのか、母が僕に向かって寝返りをうち「もう寝なさい」とささやいてくれた。

「うん・・・なんか、ゴキブリがいたような気がしたから・・・」

「寝なさい」

母は再びボクの反対側に寝返りをうって、眠ってしまった。

でも、ボクには少しだけ安心感もどった。独りじゃない。

先ほどまで静寂の中で「きいーん」と聞こえていた音は静まり返り、時計の音もどこか遠くで聞こえている。

・・・もう寝よう。あれは、きっとゴキブリだったに違いない。ゴキブリで・・・よかった。

ボクは藤模様のタオルケットを頭から被り、眠りにつくことにした。



もう天井を見上げるのはイヤだった。

たぶん誰もがそうしたに違いないとワタシは確信している。

結局ボクは、藤模様のタオルケットに包まって息苦しい一晩を過ごした。翌朝、今にも雨が降り出しそうな空を恨めしそうに見上げながら、学校へ行くことになった。

それにしても・・・

それにしても、これから毎日がこんなイヤな感じなのか？

あの桜堂の前を通り過ぎるたびに、あの気のいい老夫婦のしわしわの笑顔を見るたびに、あの細く垂れ下がった目の奥に、決して笑っていない瞳を感じなければならないのか？

教室に入ると、U治が足に包帯を巻いているのに気づく、よっぽど傷の具合が悪いのだろうか？

「どう？」

「うん、大丈夫・・・なんかばい菌が入ったみたいで、ゲロゲロになってるけど」

どうやらU治にはおどけてみせるだけの余裕はないようだ。

気がつくやG朗やS夫も集まっていた。

「なにもなかった？」

G朗が意外なことをボクにたずねて来た

「え？」

「S夫と朝来るとき話したんだけど、オレ、あれから家に帰るのに2回くらい車に引かれそうになったよ。S夫も帰り道に霊柩車をみたって」

あのころボクらのなかでは霊柩車は不吉な存在で、それをみたら親指を隠さないと、身内に不幸が訪れると本気で信じていた。。。あんなことがあった日に霊柩車を見るというのは、それはそれは不吉なことである。

「お前ちゃんと、親指かくしたのかよ」

U治がS夫にきく。

「それがさあ、あまりに急だったんで、隠せなかったんだよ」

S夫はうかない表情をしていた。

「これって、やっぱり昨日の・・・」

G朗がU治の足の包帯を見ながらつぶやいた。

「そんなのただの偶然だよ！だってオレ、なにもなかったし・・・」

ボクは嘘をついた

授業が始まると、ボクは、ボクらはとても陰鬱な気分になっていた。



## 焼却炉

---

放課後、ボクらは学校の裏に焼却炉が気になって様子を見に行った。

あのガムテープは全部燃やされただろうか？

焼却炉は白い煙を上げている。周りにはだれもいない。

焼却炉のわきに、途中まで使ったあるガムテープを見たときに、言い知れぬ不安を覚えた。

「なあ、あれ、やばくないか？」

G朗は小さな声で言いながらみんなの表情を伺っている。

「もしかしたら、ばれるかもしれないよ」

S夫は小さな声を震わせながら、すっかり怯えている様子だった。

「ねえ、今なら誰もいないし、あれ、もってかえってどっかに隠しちゃおうよ」

U治はあのことが親にばれるのはとても恐れていた。

U治の親はPTAの役員である。

その息子が学校のそばの文房具屋の倉庫からガムテープを盗み出したことがわかれば、それは想像できないほど恐ろしいことになるだろう。

ボクらの行動は早かった。

ガムテープをそれぞれひとつずつもち、ランドセルに無理やり入れると、一目散に学校の校門まで走っていった。

もはやボクらのうしろめたさは、くるところまできていた。

みんなが別れる十字路でボクらは立ち止まり、呼吸を整えた。

「じゃあ、うまく、やれよ」

とG朗の言葉でみんな別れた。

## 隠し場所

---

ボクは帰りみち、車に注意しながら、そして霊柩車がいつ通っても大丈夫なように親指を手の平に握りこみながら、家路についた。アレを隠すところはどこにでもある。ボクの家は工場の寮で、大人が知らない死角には事欠かない。

ボクは一番の隠し場所とおもわれる工場の廃材置き場へと入っていった。

ちょっとした空き地で焼却炉や使わなくなった壊れた重機の部品などが無造作においてあり、雑草がひざあたりまで生い茂っていた。

ボクはここで宝物を見つけては、大人たちに見つからないように隠すことに成功していたし、ここはボクがいて当たり前の場所。すっかり遊び場になっており、いくつかの注意事項・・・やっかいごとを起こさなければ注意されることはなかった。

でも、その日、いつもなら気にならない風景がボクには特別なことに見えてしまった。

雑草の中に足を踏み入れた瞬間、ボクの足に絡みつ়雑草の感触は、毛虫の存在を容易に想像させ、ボクの注意は必然最大限に高められた。この季節、雑草の中に毛虫を目にすることは普通だし、毛虫が食べた葉のあとを見つけるのはさらに簡単なことである。

1分、いや30秒も立たないうちに、ボクはそれをみつけてしまった。

・・・だめだ、ここもやられている

ボクはすっかり毛虫に自分の居場所を食べあらされている気分になっていた。

・・・帰ろう

家の中にもいくらでも隠し場所はある。

ボクは後ろめたい気持ちと、それを象徴するガムテープを自分の家に持ち込んでしまった。

今にして思えば、ガムテープをあな場所に投げ捨てるだけでよかったと思う。

だけどあの日のボクには・・・

いや、その前の日から、ボクには選択肢が狭められていたんだ。

あの日のボクに、ほかに何ができたというのか？

ボクはすでに扉を開けてしまっているのだから・・・

## 食卓

---

学校から帰っても、そこには誰いない。

ボクの父はボクの足元で働いている。

この家は父が働く工場と一体になっている

4階建てのアパートの最上階だ。

母は地方公務員で夕方6時くらいに帰宅する。父も母も変えてくる時間は同じくらいで、母は帰ってくるとすぐに夕飯の支度をする。ボクと弟と妹は夕方の子供向けのアニメを見ながら夕飯を待つ。およそその間に会話は無い。

食事中もテレビはつけっぱなしで、どちらかという与会話は無く、母が「野菜も食べなさい」とか「余所見をしているとこぼすわよ」というくらいである。

誰に聞かせるわけでもなく、母は、「今日は御肉が安かった」とか、「いいサカナが売ってなかった」とか、そんな話をするけど、たまに父が「ああ」とか言うくらいで、母もこれといって返事を期待しているわけでもない。

それは、この時代、どこの家庭でもごく普通なあり方だったと思うし、「今日ね、こんなことがあったんだよ」みたいなテレビドラマに出てくるような会話は、あっても月に3回くらいのものであった。

しかし、今日は少しばかり違っていた。

「今日の買い物の帰りにいつもの通りを歩いてきたけど、毛虫がいっぱいいたわよ、きもちわるい。。。自転車で踏んづけちゃったわよ」

ボクは、ドキっとした・・・また毛虫なのか！

「殺虫剤まかないとあれに、刺されるとかゆくなったりするんでしょう？学校は大丈夫？」

ボクはテレビをみて聞こえないふりをしようと思ったけど、弟は本当にテレビに夢中で、話をきいていないようだったし、無視するのも変だと思い、

「裏にはでるらしいけど、行くこと無いから・・・」

とテレビの方を見ながら、できるだけ自然に答えようとしたが、どうやら失敗したのかもしれない。

「え？」

母はボクの顔をまじまじと見ている。

ボクは必死で考えた、なんだ、なんか変なこと言ったかなあ・・・おかしいこと言ったかなあ

「うん？」

ボクは結局、変に取り繕うよりも、知らない顔を決め付けるほうがいいと思い、何故「え？」なのかわからない「うん？」を返したつもりだった。

母からすれば

感心がなければ 「うん」 あっても 「うん」か「知らない」か「ううん」か・・・

まともな会話が帰ってくることを予測してなかったか、テレビの音でボクの返事が聞き取れなかったのだろうか？

「気をつけなさいよ、刺されると痛いんだから」

「うん」

ボクはテレビをみてたけど、その内容は全く頭にはいっていなかった。

父は夕刊を眺めながら、その会話にはまったく感心がないようだったが、

「あー、そういえば、この辺でも毛虫をよくみるなあ」

ボクは必死で聞こえないふりをしていたが、いったいどうしてしまったんだと、すっかり混乱していた。

ボクは心の中で、すっかりかき乱されていたが、ご飯を口にかき込んで、おかわり、と茶碗を母に差し出すことで平静を装おうとした。が、しかし、ボクはたぶん、始めてこのタイミングで御わんを手からすべり落としてしまった。

がしゃん！

御わんはわれなかったけど、空気を壊すには十分な音だった

「なによー？よそ見してるからでしょう？」

母に叱られた。

父はボクをにらんでいる。

「テレビ消しなさい」

「えー。もー。うう」

弟は兄貴がいけないんだという抗議のまなざしでボクをにらみつけた。

ボクは。。。ボクは。。。本当に泣き出してしまいそうになるのを必死にこらえて、こらえて・・・

「ほら」

と母がご飯をいれて差し出した御わんを受取り、黙々と食事を続けた。

本当は食べたくななかなかった。

1膳しか食べないで、どうしたの？と聞かれるのがイヤだったただけなのに・・・

明らかにボクの様子はおかしいと母にはわかったみたいだったが、それは今にして思えばのことで、あの時はボクは一人ぼっちだった。

そして、ボクはただ、ただ、怯えるだけだった。



## 特別な日

---

これほどまでに最悪は日はないと思った。

実際それは間違いで、このあとにはいくらでも悪いことはおきている。

人生40年も生きていれば当たり前だ。

でも、小学校5年生のボクには、これほどまで悪いことが続く日はなかった。

気まずいままに、夕飯をすませ、テレビをみながらもボクはガムテープのことが気になって仕方がなかった。

机の引き出しの中を親が見るようなことは、年に何度もあることではないし、あったからといって、それをどうした？と問い詰められることもないように思えた。

だけど今日は特別な日・・・最悪だ。

そういうことが起きてもおかしくない。

でもだからといって、今更隠し場所をかえることもできない。

なんでもっと他の場所にしなかったのだろう。

そもそも毛虫があんなところにいなければ・・・

ボクの家にはお風呂はなかった。

銭湯に行くか、会社の入浴施設を使うか・・・

このローテーションに関しては、特に法則があったわけではなかったと思う。

・・・そうだ、このことは父が健在のうちに聞いておこう。

ボクは工場の入浴施設が嫌いだった。

銭湯に行けば友達に会うこともあるし、コーヒー牛乳が飲める。工場のお風呂は・・・

なんか不気味だった。

別に工場のお風呂で何かを見たり、聴いたりしたことはないけど、頭を洗っているとき、背後に何かの気配を感じて怖くなることは、銭湯ではなかった。

でも、銭湯への行き帰り、不気味な建物の前を通るのはイヤだった。

工場の入浴所に行くためには、工場の敷地内を歩いて奥のほうに行くのだが、誰もいなくなった無機質な工場の敷地内には、何か得体の知れないものが、闇にまぎれて徘徊しているにちがいないと、ボクはそんな風に考えていた。

でなけりゃ、なんで、もり塩なんてしておくんだ。

でなけりゃなんで稲荷なんて祭っているんだ。

この日、ボクはお風呂に行きたいと思わなかった。

誰が好んで怖いと思うところに、しかもこんな最悪の日に行くものか！

しかし、ボクがどう思おうと、それはボクの自由になることではなかった。

家族でお風呂に入ることを拒否したことは何度かあったけど、それは低学年の頃の話。

流石に5年生になってからは、そんな態度を取ったことがなかった。

ボクはなるべく暗がりには目をくれずに下を向きながらお風呂へ向かった。

こんな日は、それこそ、変なものを見てしまうかもしれない。

何かのテレビ番組・・・夏によくやる心霊現象の特番で、霊能者が言っていた。

世の中には幽霊を見やすい人とそうでない人がいて、だいたい子供の頃に一度みたら、2度、3度と見ることになるけど、それがない人は見ることはない。

ボクは霊能者の言うことをまるまる信じるような子供ではなかった。

が、しかし彼らがい言う、ボクにとって都合のいいこと・・・

もし、幽霊に付きまとわれたら、ちゃんと供養をすれば大丈夫とか、お寺に相談すれば大丈夫とか、金縛りに会いそうになったら、何でもいいから念仏を唱えると、怖いものを見ないですむとか、そういうことは興味があった。

だからボクも小学校を卒業するまでに幽霊を見なければ、霊体験をすることはないと信じていた。

そして、幽霊に出くわさないためには、幽霊が出そうなところに行かなければいいし、見なければいい。

だから、なんか不安になるときは、ボクは怖いと思う方向は見ないようにしていた。

誰にも気付かれないようにG朗やU治、特にS夫には絶対に気づかれないように細心の注意を払っていた。

S夫は、あれで、結構意地悪なのだ。

しかし、この日は、問題は幽霊ではなかったのだ。

幽霊を怖がって、下を向きながら歩いたばかりに、前を向いていれば、気づかなかったはずの踏み潰された毛虫の姿を見てしまった。

ボクはもす、すっかり毛虫に取り付かれてしまっていた。

ボクは身震いをさせながら、工場の敷地内を小走りで進み、御風呂場にたどり着いた。  
いつもと変わらない風景。お風呂の窓には大きな蛾がべったりとくっ付いている。  
当たり前風景にもかかわらず、ボクは奴らの視線を感じないわけにはいかなかった。

虫たちの視線とざわめき。。恐怖の夜の始まりだ。

## 消灯

---

夜になれば、電気を消して寝なければならない。

今日は・なんか・怖いから・嫌な・感じが・するから、電気をつけたままで、テレビをつけたままで・・・

そういうことができるようになることが大人になることだと思っていた。

夜はいつものように訪れて、いつものように更けていく・・・絶対的な時間的観念はこの際問題ではない。

ボクには1分が10分を感じられたら、それは・・・電気を消し、静まり返ったこの空間。

ここではすべての時間が止まっているように、そして、その闇にはボクしかいないという孤独。

母の寝息も、弟の蚊に刺されたあとをかきむしる音も、腰痛に悩む父の湿布の匂いも・・・

すべてボクとは関係のない世界のことであり、ボクは闇に独り、取り残されているのである。

昨日は藤模様のタオルケットを頭から被って寝ることができた。ささやかな抵抗だけど、それしかなかった。

タオルケットの中は、ボクの体温で暖められ、モワっとした湿気に包まれていた。

やや息苦しいが、昨日の夜体験したことを、二日も続けて味会うつもりはないし、実際、この方法で対処できたのだから。

時計の音はタオルケット越しにかなり鈍くなっているし、冷蔵庫の唸る音も、タオルケットが吸収し、遮断してくれている。大丈夫、ここなら安全だ。

ワタシはおよそ1時間・・・もしかしたら5分～10分なのかもしれないが、もはや確認する術はない。

闇に耐え、恐怖に耐えていた。

しかしボクの心は、ここがどんなに安全な場所だとわかっていても、どかかザラザラとした言い知れぬ不安に覆われていた。

・・・こんなものじゃない、だって、怖い映画では、これで大丈夫だって思った時が一番危ないじゃないか！

ボクの頭の中では、恐怖に耐えかねて、タオルケットから様子を伺おうと顔を出した瞬間に、天井からボクの顔をめがけて落ちてくる黒い小さな物体・・・それはボクの顔に近づくにつれて、輪郭がはっきりし、間違いなく毛虫だとわかったときには、ボクは避けきれずにボクのおでこのあたりに落ちてくることを何度も想像した。

そしてそのイメージは見る見るうちにボクの中で膨れ上がり、ボクは毛虫が額に一度落ちて、跳ね上がることもなく、ペタッと額にへばりつき、ボクの鼻に向かって這い始める感覚を繰り返し再現していた。

何度も何度も・・・何回も何回も・・・

ボクはおでこから鼻にかけて、むずがゆい感覚に襲われ、まるでそれは、本当に毛虫がボクのおでこの上を這い回っているという錯覚を確かに認識していた。

・・・ダメだ！考えちゃダメだ！

ボクは両手を顔にうずめ、このいまましい想像、幻覚、錯覚を振り払おうと顔をこすり上げた。

そこには当然に何もありません・・・でも確かめずにはられない。

何度も何度も・・・何回も何回も・・・

顔中のむず痒さがやわらいでくると、ボクはそれが、姿を消し、タオルケットの上を、頭から足のほうへ移動するさまを想像していた。それは次から次へと天井からタオルケットめがけて・・・

ポタ、ポタ、ポタ

と落ちていき、タオルケットと布団の隙間をさがして上に下に徘徊する。

毛虫は時には頭を少しだけもたげて、お互いの位置を確認しあうようなしぐさで、無機質なコミュニケーションを取っているようだった。

ソッチ ハ ドウダ？

コッチ ハ ダメダ

アタマ ノ ホウハ ガード ガ カタイ

アシ ノ ホウハ スキマ ガ アルカ？

ワカッタ カクニンスル

ボクの全身はすっかり鳥肌が立ち、体中の毛穴が開いては閉じ、汗が噴出してきた。  
その汗はやがて重力に耐え切れず、ボクの肌の上を滑り落ちていく。  
その感覚はまるで、ヤツらがボクの皮膚の上を徘徊しているような感覚。

ボクはもう、限界だった。

## 攻防

---

ボクが恐怖に怯えれば怯えるほどに、恐怖に対する感覚は敏感になり、ボクは全身で恐怖を感じていた。

身を震わせながら、自分の肌を滑り落ちる汗にも、もはや飛び上がるような状態である。いけないと思いながらも体が反応して、右足がタオルケットの足元か出てしまった。

やばい・・・やばい・・・やばい

ボクは意識を全て右足に集中し、できるだけそーっと、できるだけ早く、タオルケットの中にしまおうと試みた。

が、それは無駄だった。ボクのアシはすっかり汗ばんでしまい、汗でびしょびしょになった足はタオルケットをそのまま捲り上げてしまうのである。

イヤだ、イヤだ、イヤだ・・・

やつらはのろまだ！

のろまだけど確実に少しずつ、少しずつ、ボクの足元へ向かっていく。

ボクには毛虫の目が無機質な表情から真っ赤に染め上がり、砂漠を走る戦車のように失踪する様を思い浮かべる。

思い浮かべながら・・・

ちがう！毛虫に目なんてあるものか！毛虫に目はない！毛虫に目はない！

ミセテ ヤロウ

ミセテ ヤロウ

ミセテ ヤロウ

それは音ではなくて、ボクの意識の中に直接働きかけてくる声というよりは振動、或いは波動のようなもので、耳の奥というよりもアタマの天辺から骨を伝わってくるような「響き」である。

見ない、見ない、見ない

ボクはアシをばたばたさせながら、なんとかタオルケットの中に右足を入れようと必死になった。

そしてそれは成功した。



右足でまくられたタオルケットを左足の親指に引っ掛けて思いっきり下のほうへ足を伸ばした。

## 赤い目

---

必然。

それは、そう必然。

ボクのアタマは、タオルケットから顔を出し、力いっばいつぶっていたボクの両目は、あまりの急な出来事に、思わず目を開けてしまった。

ボクは見た

ボクは見たんだ

ボクは見てしまったんだ

天井の闇。。。闇なんてあるはずがない

そこには天井があるはずで、闇があるはずはない

そこには天井があるはずで、動いてなんか居るはずがない

動いてる

わさわさと

わさわさと

ボクはあわてて両手でタオルケットをつかみ、頭から被り直そうとしたんだ。

でも、ボクがつかんだのは・・・

ああ、そう、そうなのだ

藤模様のタオルケットの端はタオル生地ふわっとした感触をつかむはずの手は、なにかすごくいやな感触で覆われていた。

ぐにゅじゅうわあ！けっ・けっ・けえー！

ボクの全身は、わさわさと・・・

わさわとざわめきたち・・・

そのざわめきに呼応するように、天井に無数の赤い光が見えた。  
見てしまった。

ヤツら . . .

ボクを . . .

見てるんだ . . .

## 反撃

---

こんなの現実じゃない！

悪い夢に決まっている！

そう、夢だから、夢だからたぶん・・・

ワタシは父や母、弟や妹が寝ているはずの場所に視線を移した。

そこにはタオルケットから・・・頭がでていて・・・横たわる人の姿・・・が確かにあった。

しかし、髪の毛に見えたそれは、わさわさと蠢いていたし、タオルケットの中身も人の形の塊ではあるが、やはり中で何かが蠢いている。

ほらみろ！こんな現実離れした世界はありやしない。

これは悪い夢なのだから。

しかし、現実か夢かという問題は事態の解決策とはならない。

現にボクは怖いのだ。

ボクは自分がイヤだと思うことが、そのままこの世界に現れていることに気づき始めていた。

でも、だからといって、この恐怖から逃れるすべはない。

ひとつの恐怖は次の恐怖を呼び込む。

もはや恐怖の連鎖はとめることができない。

ボクは藤模様のタオルケットにまわりつき、或いは天井からこちらをじっと見ているヤツらが、ボクのからだを覆いつくし、パジャマの足の裾の隙間、腕の袖の隙間、上着やズボンのボタンを留めているところのあいだから、ボクの肌をめがけてじわじわと迫ってくるさまを想像しそうになって、頭を左右に振った。

ダメだ、ダメだ、こんなことじゃ・・・

なにか、毛虫を撃退する手段を考えなきゃ・・・

毛虫を撃退する？

そうだ、ガムテープ！

ボクがそのことを思いついたとき、ヤツらはいっせいにざわめきたった。

ヤメロー

ヤメロー

ヤメロー

クルシィー

クルシィー

クルシィー

## 逆転

---

ヤツらのざわめきはひとつの声になっていった。

ボクは机の引き出しの置くからガムテープを取り出そうとした。

ボクは強い気持ちで念じた。

ここにガムテープは絶対にある！

なくなってなんかいないし、引き出しにカギなんか掛かってない！

ボクはすばやく布団から起き上がると机に向かった歩き出した。

足元に蠢くものを踏みつけるイヤな感触を足の裏に感じながら、机の引き出しに手をかけた。

絶対に開く！

絶対にある！

ボクは力いっぱい引き出しを引っ張った。

ガシャガシャガシャ！

勢いあまって机の上に散乱していた文房具が崩れ落ちる。

ボクは机の引き出しを開けることに成功し、そして、あの忌々しいガムテープ・・・焼却されていたかもしれない、もしかしたら工場に捨ててきたかもしれないガムテープは、確かに引き出しの中にあった。

ボクが暗がりの中でその存在を確認できたのは、ガムテープが禍々しい青白い光を放っていたからかもしれないが、今でははっきりと思い出すことができない。

これで！

ボクはガムテープを手に取り、テープを引き伸ばした。

ビリビリビリ

イヤな音だ。ただどこいつがあれば・・・

これで立場は逆転だ！

ヤメロー

ヤメロー

ヤメロー

蟲のざわめきは一段と大きくなった。

ボクは引き伸ばしたガムテープを両手に構え、それを床や壁や天井に向けた。

今度はこっちの番だ！

さながらドラキュラに十字架を向ける姿に似ていたかもしれない。

或いは刑事ドラマでダイナマイトにライターを近づけながら警官を威嚇する逃走犯か？

ボクは森の獣たちがたいまつを恐れるように、毛虫もこのガムテープを恐れているのだと思った。

一瞬、ヤツらのざわめきが停止した。

静止？

制止？

正視？

静思？

静かに、身を制し、じっくり見ながら、考えている。

ワサワサとしていた「それ」は一瞬にしてひとつの集合体に変貌したかのようだった。

ボクはヤバイと思った。

そう、ボクは想像してしまっていた。

ヤツらがなにがしらの手段で互いのコミュニケーションをとり、何をすべきかを理解し、その行動の準備をするためにこちらをじっくりと観察し、一気にその力を解放する瞬間を待っていることを・・・

あっ！

考えちゃいけない、想像しちゃいけない、感じちゃいけないんだ

恐怖を・・・感じちゃ・・・考えちゃ・・・想像しちゃ・・・イケナイ

ボクは思わず自分のうかつさに悲鳴をあげていた。



## ワサワサのグシャグシャのザワザワ

---

### ゾワゾワゾワ

ヤツラは恐ろしいほどの速さでボクの口めがけて跳躍あるいは飛翔あるいは猛進してきたのである。

床にうごめいていた「それ」は、身をくねらせながら小さく飛び上がり、さらにその上に次の蟲がのしかかって飛び上がる・・・これを繰り返すことで蟲の波がボクの口めがけて跳躍してきた。

天井にへばりついていたやつらは身体を振り子のように振り出すことでボクの口めがけて飛翔した。

いつの間にかボクの身体にしがみついていたそれは、ボクの口めがけて恐ろしい速さで猛進してきた。

口を手で押さえること、身体を動かしてよけること、口を閉じること。

すべての行動が一瞬、ほんの一瞬遅れたのだ。

気がつけばボクの顔はワサワサしていたし、ボクの口の中はグシャグシャしていたし、ボクの体中は裸で冬の芝生の上に寝転んだ時のようなザワザワした不快感に覆われていた。

ボクは、恐怖に、ただ、じっと、耐えるしか、なかったのだ。

## 同化

---

いやだ、いやだ、いやだあああ！

ボクの心はついに壊れた。

とにかく、ヤツらを止めなければ。

ボクはボクにできることをするだけだ。

ボクの両手にはガムテープがある、これでヤツらを止める！

ボクはガムテープで自分の口をふさいだ。

次の瞬間、ヤツラの目標はボクの鼻の穴に・・・

ここも止める！

ボクは鼻の穴をガムテープで止めた。

次は耳だっ！

ボクは両耳が隠れるようにガムテープでぐるぐると自分の顔を巻いていった。

大丈夫、これでもう大丈夫。ちょっと息苦しいけど、ちょっと聞こえないけど、ちょっと見えな  
いけど。

でも・・・これで・・・だい・・・じょう・・・ぶ

苦しい・・・見えない・・・聞こえない・・・動けない・・・助けて・・・助けて

クルシイ・・・ミエナイ・・・キコエナイ・・・ウゴケナイ・・・タスケテ・・・タスケテ

いつの間にかボクの意識は「それ」と同化していた。

ガムテープにぐるぐる巻きになったボクは、床に這いずり回り、穴と穴と言うところから侵入し  
たヤツらといつの間にか意識が繋がるようになっていた。

ゴメンナサイ・・・ゴメンナサイ・・・ゴメンナサイ・・・



## 終わらぬ悪夢

---

その日の朝、ボクはタオルケットにぐるぐる巻きになって、汗をびっしょりかいて目を覚ました。

具合でも悪いのかという両親の心配をよそに、ボクは悪夢のことをずっと考えていた。

・・・なんでもない

そう応えるしかなかった。

教室に入るとU治は相変わらずマンガのキャラクターのモノマネをして陽気に振舞っている。

「グワシ！」

S夫は家の近くでボール遊びをしているときに、通りかかった車にボールを惹かれてしまい、ペシャンコにされたらしい。

G朗はそんなS夫に向かって、  
「うそだー、どうせどっかになくしちゃたんだろう」  
とからかっている。

もう、終わったんだろうか？

その日、ボクらはいつもの公園に遊びにいった。  
今度はG朗のボールでこの前の続きを始めた。

最初、陰鬱な気分だったけど、遊んでいるうちに、なんだかすべて終わったような気がしていた。

だけど、ボールが前と同じように散策路の方に転がると、ボクは茂みの中に入る気にはなれなかった。

なれなかったけど・・・ボールを投げたのはボクだった。

「取りに行けよー」

G朗が意地悪い言い方でボクをにらみつける。

ボクは仕方がなく、散策路へ入っていった。

ボクの不運はどうやらまだ続いているらしい。

散策路の茂みの奥に、ヤマンバがボールを持って立っていた。

## ヤマンバ、再び

---

ヤマンバはたぶん、「アー、アー」と言ったのだと思うけど、「アー、アー」と言いたかったのかはわからない。

ヤマンバは、さっきと同じようにボールを下手で投げるような素振りをするが、投げはしない。投げられないのか？

ボクは恐る恐るヤマンバのほうに近づいた。

そのときだった

ボクの目の前をブーンと音を立てながら、黄色と黒の縞々模様・・・蜂が横切った。ボクは驚いて、後ろに飛びよけた。

「大丈夫さ」

ヤマンバがかろうじてそう聞き取れるような、喉に何かが絡まるような枯れた声で言ったのが聞こえた。

「え？」

聞こえたが、意味を理解できなかった。

「よー、見てみ？」

ヤマンバの視線の先にはツバキの木があり、その一部はチャドクガの幼虫によって食害されていた。

足長バチはツバキの葉に止まるとチャドクガの幼虫・・・アレだ、アレがボクを・・・をつかんで飛んでいった。

「蜂はな、あーやって、毛虫を退治してくれる。なーんも、こええことねーんだ」

・・・毛虫を・・・駆除してくれる？

「ホレ」

ヤマンバはどうやらボクに直接ボールを手渡したらしい。

ボクは何もかも、すっかり意表を突かれた感じで、ヤマンバに近づき、ボールを受け取った。

「ありがとうございます」

ボクはシワシワの手からボールを渡されて、あっさりするほど素直にその言葉を発していた。

ヤマンバは振り向いて、しゃがみこみ、後ろにあった木の根あたりをスコップで掘り始めた。ヤマンバの背中越しに覗いてみると、そこには禍々しい色をしたキノコが生えていた。ヤマンバは園芸用のスコップでそのキノコを土ごと掘り出し、前掛けのポケットから取り出したビニール袋の中に入れ始めた。

「それ、どーするんですか？」

ボクはK山が言っていたことを思い出していた。まさかこれ食べるのか？それとも？

「これはな、これは、口にしたらエライことになるキノコじゃ」

・・・つまり毒キノコ？

「いたずら坊主に見つかる前に、こうして採っておかないと危ねーからよ」

「えっ、じゃーこれ、毒キノコ？」

「まあ、そんなもんだ。だからよ、めったに触るんじゃねーぞ。わかったけ？」

「はい。あの・・・さっきの蜂の話なんですけど」

ボクは蜂が毛虫を食べるなんて知らなかった。

「あー、蜂？あー、面白いもん見せてやっから」

ヤマンバは立ち上がってさっき蜂がチャドクガの幼虫を捕食したツバキの方に歩いていった。ボクはそこには近づきたいくはなかったけど、ヤマンバが手招きをするので、しかたなく近づいた。

ヤマンバは、チャドクガの幼虫に侵食されたツバキの葉の中から一枚の葉を指差した。

「ほれ、こいつの背中、綿簿っ子がついてるだろ」

綿簿っ子？ヤマンバに言われた葉を見ると、そこにはチャドクガの幼虫が数匹ツバキの葉を食べていたが、そのうちの何匹かは背中に小さな白い綿がいくつもついていた。

「この綿はな、蜂の卵さね」

「蜂の卵？」

「さっきのアシナガバチはそのまま毛虫を団子みてえにして、蜂の巣にもっていくけどよ、なか



には幼虫に直接卵を植えつけちゃうのもいるのさね」

そういえば聞いたことがある。

昆虫好きのG朗が、ハエの中には他の生き物・・・そして中には人間の皮膚に卵を植えつけて幼虫が寄生するやつがいると。

「ボールあったか？」

G朗の声がする。

「あの・・・ありがとうございました！」

ボクは、深々と頭を下げると、みんなのところへ駆け出した。

ボクの足取りは、すっかり軽くなっていた。

## 悪い予感

---

ヤマンバとのやり取りで、なんとなく気分がすっきりとしていたボクは、家に帰るなり、すっかり元気をなくしていた。

家に帰り、父や母が帰るまでに洗濯物を取り込むこと、米を研ぐこと、食器を洗うことはボクと弟の仕事だった。

今日は食器洗いは弟、ボクは洗濯物を取り込もうとした。

夕方の陽射しはオレンジ色が少しくすんでいて、目に入っても痛くはなかった。

ボクらの住む会社の寮は西向きで、夕方の陽射しはもろに部屋に入ってくる。

洗濯物を取り込むのに厄介なのは、シーツやバスタオルだ。

地面に引きずらないように注意しなければならない。

バスタオルは平気だけど、シーツやタオルケットはボクらの身長にはちょっとあまるのだ。

ボクは夕べ悪夢にうなされ、汗でびしょびしょになった藤模様のタオルケットを取り込もうとして、一瞬息が止まった。

食い荒らされている・・・ヤツらに。

藤の葉が・・・食い荒らされている。

あれは、悪い夢ではなかったのか！

ボクは母が帰る変なり、タオルケットが大変なことになっていると見せた。

「あー、これねー、間違っって漂白剤こぼしちゃって、あらあら、やっぱりだいぶ色が抜けちゃったわねー」

・・・そーか、そうなのか？

はたして、本当に、そうなのか？

これは、ヤツらの仕業じゃないのか？

## ヤツらはきつとやって来る

---

その夜、ボクは部屋の明かりが消され、みんなが寝静まるまで、タオルケットのなかでじっと待っていた。

来る

きつと、来る

やがて「静寂の音」がボクの耳の中でキーンと響き始めた。

・・・ほら、来た！

冷蔵庫は深夜の宴を初め、時計はカチカチカチからチカチカチカに変わった。

・・・そうだ、ヤツらはきつと来る！

ボクはタオルケットから首を出し、天井を眺めた。

天井には何かシミのような、模様のようなものが、少しだけ蠢いた様な・・・

・・・同じだ！ヤツらだ！

でも、ボクは、大丈夫。

ガムテープなんか使わなくたって、ボクは大丈夫。

・・・ゴメンナサイ、ゴメンナサイ、ゴメンナサイ　　・・・

来た！

天井のシミはヤツらの姿に代わって行った。

大丈夫、ボクにはできる。ボクにはできるんだ。

ボクは、必死に念じた。

ボクにはできる。

・・・蜂、アシナガバチ、アシナガバチは毛虫をやっつける！

ボクは公園でみた足長バチの姿を必死で思い出していた。

黄色と黒の縞々の・・・ブーンと音がする羽。

三角の頭、鋭いキバ、長い足・・・それから、それから・・・

コワイ、コワイ、コワイ

ガムテープ、ガムテープ、ガムテープ

いらない！ガムテープはもう、いらない！

もうボクにはいらない！

黄色と黒の縞々の・・・ブーンと音がする羽。

三角の頭、鋭いキバ、長い足・・・目は、目は、大きくて・・・長い触角。

ヤメロー、ヤメロー、ヤメロー

部屋の窓の隙間から・・・そう、換気扇の隙間からだって入ってこれる！

黄色くて、黒くて、縞々で、お尻が大きくて、羽は、羽は茶色で・・・

三角の頭、長い触角、大きい目、鋭いキバ、ブーンと音が！

## 決着

---

ブーン

それは暗がりの中で、どこからともなく聞こえてきた。

蜂の、足長バチの羽音。

そうだ、そこだ、あそこにいるんだ！毛虫が！

黒いシミははっきりとしたチャドクガの幼虫の形になったようにみえた。

それが恨めしそうにボクをにらんでいる。

いまにもボクに飛び掛りそうな感じがしたけど、ボクには次のイメージが見えていた。

身体を振り子のようにしてボクの顔めがけて跳躍しようとしている毛虫を足長バチが鋭い牙で噛み付き、どこか闇の中に持ち去る姿を・・・

いまだ！行け！

それは目にも留まらぬ速さで、ボクの視界を横切り、天井めがけて飛んでいった。

ボクの全身にワサワサとした感覚がよみがえり、一瞬ボクの顔めがけて、毛虫が跳躍したようにみえたが、アシナガバチは毛虫を取られ、闇のかなたに姿を消した。

翌朝、ボクはすっきりとした目覚めの中で、昨日の夜のこと、そして、今日までおきた一連の出来事を振り返った。

やっぱり、桜堂の気のいい老夫婦にあやまらないといけない。

ボクはヤマンバに自然と言えた「ありがとう」の言葉と、これから言わなければならない「ごめんなさい」の言葉が、「開けてしまった闇の扉」を再び施錠するためのカギかもしれないと、そんな風に考えていた。

## 終章

---

恐怖は誰にでもある。

でも、それに打ち勝つことのできる力を、誰もが持っているのだとワタシは思う。

小学校5年生のボクは成長し、自立し、妻と出会い、子を授かり、育てている。

息子は小学校2年生になるが、今、まさに恐怖を抱えているようだ。

「パパ。。。あっちの部屋に寝るとね。。。シーーンって音がするから眠れないよ」

娘は小学校4年生、時々夜中に泣きながらワタシを起こす。

「怖い夢を見たの。街にね、ひとりになっちゃって・・・パパもママもいたのに、いつの間にかひとりで・・・そしたらね、ゾンビみたいのが追いかけてくるの」

娘や息子はどうやってこれらの恐怖の打ち勝っていくだろうか？

ワタシが闇の中に「存在を確認した恐怖」は今でも私たちのわまりに潜んでいる。

ワタシの家の中にも、アナタのそばにも、アナタの近しい人にも。

どうか恐怖に怯える人たちにアシナガバチが現れますように

ワタシは恐怖に向き合い、恐怖を観察し、恐怖の存在を確認し、そして恐怖に打ち勝つことができた。

もし、アナタが恐怖に怯え、恐怖から逃れ、目をそむけ、恐怖を否定したとき、アナタはアシナガバチに出会うことができないかもしれない。

もし、そうなったら・・・

「アナタ」はただ、身を震わす思いで、それに耐えなければならない

## あとがき

---

小生は毛虫が大嫌いです。

はっきり言って毛虫が怖い。

何故にそれほどまでに怖がるのか？

実のところ本当の理由はわからないのです。

この物語は、小生が中学生か、高校生の頃に、すでにプロットが存在していました。

夜中に急に不安になることって、ありますよね。

その不安を一つの形にしてみたら面白いんじゃないかなあと思って、自分が一番嫌いな毛虫が天井から落ちてくることを想像したのです。

最初は「遊び」のつもりで面白半分で、そのようなことを妄想していたのですが、それはだんだんエスカレートして、物語にあるような、毛虫嫌いにはそれはそれはおぞましいシチュエーションを妄想してしまったのです。

もはやその妄想は、ブレーキを失った暴走トラックのごとく、ワタシの存在そのものを否定するかのごとく、次から次へと恐ろしい「妄想」が小生の頭を駆け巡りました。

単純な話、もしワタシが幽霊が怖いと思っていたら、あのとき幽霊に出会っていたでしょう。

宇宙人に連れ去られるのが怖いと思っていたら、きっと体内に何かを埋められて記憶を消されていたに違いありません。

ワタシは恐怖とはそういうものではないかと思っています。

さて、これほどの分量の物語を書こうとは、最初は思っていなかったのです。が、小学生5年生のボクは、小生の半身をすっかり乗っ取ってしまい、気がつけば、少年の頃の、微かな感覚・・・自分で考え、行動するようになるうえで、精神的に不安定な部分・・・を小生に蘇らせてくれました。

しかし、物語の大部分は、内側から湧き出たというよりは、外側の刺激によって引き出されたものでした。

「終章」にあるように、ワタシの子供のエピソード・・・あれはまさしく小生の実体験であり、チャドクガに関しては、数年前、近所で大発生し、我が家はまさに毛虫に襲われたのであります。これは業者が駆除をしたのですが、先日、我が家にだけ毛虫が現れました。なんいうことでしょうか。ヤツらは未だにワタシの精神を蝕もうと小生を狙っているのでしょうか？

この物語は終章を迎えましたが、果たして、ボクは桜堂にあやまりにいたのでしょうか？

もし、それが、できていなければ、闇の扉のカギは、まだ開いたままなのかもしれません。

2010年7月

今日はこれからブラジルVSオランダ戦です  
めけめけ